「呼応」における陳述副詞の機能 ー「たぶん」と「だろう」の場合ー

木下 りか

1. はじめに

陳述副詞に応じて特定の形式が現れる現象は、「呼応」と呼ばれてきた。「呼応」は、形式間の多対多の結びつきであり、「たぶん」の場合、「だろう」や「確言形」、「にちがいない」など、一群の形式と共起し得る。しかし、中でも「だろう」と共起する頻度が極めて高い(森本 1994、工藤2000、杉村 2009など)。本稿の考察対象は、次例のように「だろう」と「呼応」する場合の陳述副詞「たぶん」である。

(1) たぶん明日は晴れるだろう。

「呼応」に関する先行研究では、専ら陳述副詞とそれに「呼応」する形式との類似性について考察がなされてきた。山田(1936)は、「呼応」する形式には、陳述の仕方にかかわる(事柄的な内容にはかかわらない)という共通点があることを指摘している。そして、陳述副詞は、「述語の陳述の方法を修飾する」(p.388)。

この特徴は「たぶん」にも認められると考えられる。しかし、「述語の陳述の方法」をどのように「修飾」するのかは明らかにされていない。副詞に関するその後の研究では「呼応」する文末形式の出現頻度の差などに関心が寄せられたが、「修飾」の内実に関する考察は、管見の限り、

手つかずのままであったと言える。

では、「たぶん」はどのように「述語の 陳述の方法を修飾する」のだろうか。

「たぶん」の有無によって生じる相違を例文から読み取るのは容易ではない。例(1)は「明日は晴れる」ことが不確かであることを表している。そして、例(1)から「たぶん」を除いた次の例(2)も不確かさを表していることに変わりはない。

(2) 明日は晴れるだろう。

以上の点を踏まえ、本稿は以下の二点 について考察を行う。

- (I)次の①と②はどう異なるのか¹⁾。
- ①「だろう」が「たぶん」と共起する場合(以下「たぶん~だろう」とする)
- ②「だろう」が「たぶん」と共起しない場合(以下「φ~だろう」とする)
- (Ⅱ)「たぶん」にどのような意味を認めれば(Ⅰ)で見た相違が説明できるのか。

2.「たぶん~だろう」「φ~だろう」

本節では、(I)について見ていく。

2.1 認識不可能であることが前文脈で明示されている場合

次の例(3)は「たぶん~だろう」の使 用例だが、ここから「たぶん」を除いた例 (4) は、やや不自然である。

- (3) 場所の記憶はなかった。いつ話したかも<u>忘れてしまった。たぶん</u>八月の終わりだろう。 (レテの支流)
- (4) ?場所の記憶はなかった。いつ話したかも<u>忘れてしまった</u>。八月の終わり<u>だろう</u>。

例 (4) が容認されるとすれば、「忘れてしまった」と述べた後に間を置いて、「八月の終わりだろう」と述べる場合であろう。つまり、「 ϕ ~だろう」は、「忘れた」「わからない」など、認識できないことを表す表現の「直後」に(間をおかずに)続くと容認されにくい。次のように整理しておく。

- (5) 認識不可能であると述べた「直後」に (間をおかずに)認識内容を提示する場合、
 - a. たぶん~だろう
 - b. ? *φ*~だろう

次の例(6)(7)も、例(3)の類例である。 いずれも間を置くことによって前文脈と の関連を一度断たない限り、「たぶん」を 除くとやや不自然になる。

(6) 上の方に何かを入れたような二つの穴があき、木栓がつめてある。バター茶をつく道具か、麦の脱穀をする道具か用途は<u>よく分からない。多分</u>バター茶を作る道具だろう。

(楼蘭古城にたたずんで)

(7) アパートで猫と二人ぐらし。「仕事をしていても、車にひかれてやしないかと心配で…」 いまはどうしているか知

<u>らない</u>。<u>たぶん</u>猫と遊んでいるの<u>だろう</u>。 (活字狂奏曲)

2.2 認識不可能であることが前文脈で暗示されている場合

前節(2.1節)の例は、認識不可能であることが「明示されている」場合であるが、「暗示されている」場合についても(5)と同様の容認度の差異が観察される。

- (8) 認識不可能であることが暗示された 「直後」に(間をおかずに)認識内容を提 示する場合、
 - a. たぶん~だろう
 - b. ? *ゅ*~だろう

次例はこの場合に相当する。「たぶん」を用いた例 (9) ほうが例 (10) よりも自然である。

- (9) オートロックがかからないよう に、隙間に本が挟んであるのが見える。 多分聖書だろう。 (爆弾魔)
- (10) ?オートロックがかからないよう に、隙間に本が挟んであるのが見える。 聖書だろう。

これらの例の破線部は、あるモノが「本」と認識されていることを示している。そして後続文では、「聖書」だと捉えなおされている。同じモノが前文脈では「聖書」と特定されていなかったことになり、それにより「聖書」とは認識不可能であったことが暗示されている。仮に最初から「聖書」だと認識されていれば、破線部は次のように表現されたであろう。

(11)隙間に聖書が挟んであるのが見える。

このように、認識不可能であることが文脈によって暗示されている場合も、(8)に示したように「たぶん~だろう」の容認度のほうが高い。

次も同様の例である。ただし、先の例 (9) (10) とは異なり、後に特定化される モノが前文脈では特定化されていなかったことによって認識不可能であったこと が暗示されるわけではない。しかし、認識不可能であることが暗示されている点は同じである。

(12) ステンドグラスが嵌めこまれた 白いドアがある。その右に、白い鉄の格 子で覆った窓。多分応接間だろう。

(泳ぎたくない川)

(13)? ステンドグラスが嵌めこまれた 白いドアがある。その右に、白い鉄の格 子で覆った窓。 応接間だろう。

この例の破線部は、ある場所が「応接間だ」とは認識されないままに、観察が続けられていることを示している。「わからない」「忘れた」など、認識できないと明示する文言はないが、辺りを見ているにも拘らず、「応接間」だとは認識できていないことが暗示されていると言える。このとき、「たぶん~だろう」の容認度のほうが高い。

以上のことから、認識できないことが 明示されている場合((5)参照)であれ、 暗示されている場合((8)参照)であれ、 その「直後」においては、「たぶん~だろ う」の容認度のほうが高いと考えられる。

2.3 「蓋然性」の程度差

では、なぜこのような差異があるのか。 2.4節、2.5節の考察を先取りするならば、その理由は、次のように考えられる。

(14)「たぶん~だろう」のほうが「 ϕ ~だろう」よりも「蓋然性」の度合が低い。

次のように示しておく。

(15)「ゅ~だろう」>「たぶん~だろう」

「蓋然性」を、次のように概念規定する。

(16)「蓋然性」:矛盾対立する命題の存在が否定されていない。

次例 (17) (18) に即して見るならば、「蓋然性」とは、「雨が降る」「曇る」など、「晴れる」と矛盾対立する命題の存在が、何らかの形で示されていることを言う。

- (17) 明日は晴れるだろう。
- (18) <u>たぶん</u>明日は晴れる<u>だろう</u>。

「蓋然性」はまた、矛盾対立する命題の存在を認める度合によって、程度性を持つと考えられる。(15)は、「たぶん」を用いた例(18)のほうが用いない例(17)よりも、矛盾対立する命題の存在を認める度合が高いということを意味している。

2.4 認識不可能だと示された「直後」の 認識文

(15)に示したように考えれば、認識不可能だと述べた「直後」において、「たぶん~だろう」のほうが容認されやすい理

由が説明可能である。

認識不可能であると述べた後に提示される認識内容の「蓋然性」は、ある程度低くなければならないと考えられる。「わからなかった」のに急に確かな認識が得られるという展開は唐突で、そのような文脈の流れはテクストの一貫性を崩すことになるからである。

(19) 認識不可能であることが示された 「直後」の認識文の「蓋然性」はそれほど 高くはならない。

この妥当性は、認識不可能であることが示された「直後」であっても「 ϕ ~かもしれない」ならば容認されることによっても確かめられる。

- (20)場所の記憶はなかった。いつ話したかも<u>忘れてしまった</u>。八月の終わり<u>かも</u>しれない。
- (21) いつもあとを尾けられているような、おかしな感じがある。いつのころからか<u>わからない</u>。ごく最近<u>かもしれない</u>し、今まで気づかなかっただけ<u>かもしれない</u>。 (蝶々夫人の事件簿)

「かもしれない」と「ダロウとの違いは、その推量の妥当性についての確信の度合いが低いことであろう」(寺村 1984: 235)」と指摘されているように、「 ϕ ~かもしれない」の「蓋然性」の程度は、「 ϕ ~だろう」よりも低いと考えられる。

したがって、「わからない」 などと述べた「直後」に「 ϕ ~だろう」は不自然であっても「 ϕ ~かもしれない」 ならば容認されるということは、(19)の記述を裏付け

る。「かもしれない」はもともと「蓋然性」 の程度が低いため副詞が文頭に位置して いなくとも、「わからない」と述べた後に 位置するのにふさわしいと考えられるの である。

(5)(8)は(19)の文脈下で「たぶん~だろう」ならば容認されることを示している。ここから、「 ϕ ~だろう」より「たぶん~だろう」の「蓋然性」のほうが低い((15))と考えられる。

言うまでもないことだが、(15) が示すのは、両者の「蓋然性」の程度差にすぎない。どの程度低ければ「わからない」と述べた「直後」の認識文として適切であるのかはわからない。しかし、ある程度(「 ϕ ~だろう」は許されないが「たぶん~だろう」や「 ϕ ~かもしれない」は許される程度) 低くなければならないのだと考えることは可能である。

2.5 「蓋然性」を高める文脈

「たぶん~だろう」と「 ϕ ~だろう」との間に「蓋然性」の程度差を認める (15)の記述の妥当性は、次の①②のような文脈が与えられれば、「 ϕ ~だろう」も自然になることからも確かめられる。

- ①認識不可能だと述べた後に「間」が置かれた場合
- ②認識の根拠が示された場合 順に見ていこう。

①認識不可能だと述べた後に「間」が置かれた場合

認識不可能であることが示された後に「間」が置かれれば、「φ~だろう」の容認度は上がる。「間」のあいだに思考をめぐらせ、それによって「蓋然性」の高い認

識に至ったという推測が成り立つからだと考えられる。この場合、認識不可能な状態から、突然確かな認識を得た状態に至ったことにはならない。

たとえば先の例(6)の「たぶん~だろう」から「たぶん」を除いても、「間」があれば自然である。次例(22)の丸括弧内に示すように、「間」のあいだに思考をめぐらせていると想定することが可能だからだと考えられる。

(22) 上の方に何かを入れたような二つの穴があき、木栓がつめてある。バター茶をつく道具か、麦の脱穀をする道具か用途はよく分からない。(でもこの辺りの麦の生産量はごくわずかだ)バター茶を作る道具だろう。

(例(6)を再掲:一部改)

②認識の根拠が示された場合

認識の根拠が文脈で明示された場合にも、突然「蓋然性」の高い認識に至ったことにはならない。このときも「 ϕ ~だろう」は容認される。次例を見てみよう。

(23)?オートロックがかからないよう に、隙間に本が挟んであるのが見える。 聖書<u>だろう</u>。 ((10)を再掲)

(24) オートロックがかからないように、 隙間に本が挟んであるのが見える。聖書 だろう。<u>黒の革表紙に金の文字が光って</u> いる。

この場合、二重下線部によって、周囲 に目をやり続けている(辺りを観察し続 けている)中で得られた情報に依ること で、確かな認識に至ったことが示される。 突然「蓋然性」の高い認識に至ったこと にはならない。

根拠の存在は、理由を表す接続形式によって示すこともできる。先の例(13)((25)として再掲)の破線部は、「応接間」だと判断する根拠として希薄であり、「φ~だろう」を用いると突然「蓋然性」の高い認識に至ったことになってしまう。

(25)? ステンドグラスが嵌めこまれた 白いドアがある。その右に、白い鉄の格 子で覆った窓。 応接間だろう。

((13)を再掲)

しかし、次例のように「からすると」などの接続形式によって、半ば強制的に根拠と帰結との関係を表示すれば「 $\phi \sim$ だろう」も自然になる。

(26) ステンドグラスが嵌めこまれた白いドアがある。その右に、白い鉄の格子で覆った窓があるところ<u>からすると</u>、応接間<u>だろう</u>。

以上のように、「蓋然性」を高くする文脈が与えられれば、「 ϕ ~だろう」は自然になる。この事実も、(15)の記述を裏付ける。「たぶん」は「 ϕ ~だろう」に「よくわからないが」というニュアンスを加える役割を果たしていると考えられる。

3. 「たぶん」の意味

本節では「たぶん~だろう」と「 ϕ ~だろう」との間の「蓋然性」の程度差を、「たぶん」の意味から説明可能かという、第1節(II)の問題について考察する。

3.1 「蓋然性」に関する先行研究の記述

まず、「たぶん」と「だろう」それぞれの「蓋然性」に関してどのような指摘がされてきたかを見る。その記述から、「たぶん~だろう」の「蓋然性」ほうが「φ~だろう」よりも低い理由は説明可能だろうか。

「たぶん」は次のように記述されている。

(27)「十中八九は断定し得るが、一分の 疑ひを残してゐるやうな気持を表現して ゐる」 (時枝 1950: 123) (28)「可能性の高いことを推量する様子 を表す」 (飛田・浅田1994:101)

「たぶん」が「十中八九は断定し得る」「可能性が高い」と言えるような確からしさを表すという記述は言語直観にも合致する。しかし、「きっと」との意味の相違を踏まえ、次のような指摘もなされている。

(29) 両語 (おそらく、たぶん:引用者の 補注)とも「きっと」に比べて弱い推量。 (森田 1989: 374)

(30)「たぶん」は「おそらく」より実現の可能性が低く、「きっと」は実現の可能性について確信を持っている様子が暗示される。 (飛田・浅田 1994:101)

一方、「蓋然性」という観点から見た「だろう」の特徴については、次に代表される多くの記述がある。

(31)「ニチガイナイは、ふつう確信の度合いが、ダロウやカモシレナイより強いと説明され、それはまちがいではない」 (寺村 1984: 235)

以上の記述から明らかなのは、「たぶん」と「だろう」の「蓋然性」の程度がそれぞれ、「きっと」や「にちがいない」よりも低いということである。

- (32) きっと>たぶん
- (33) にちがいない>だろう

しかし、(32)(33)は共通の尺度に基づいた比較ではない。したがってこの特徴把握から、「たぶん」が「蓋然性」を下げる理由を説明するのは難しい。

3.2 二種の可能性

「蓋然性」は、(16)で述べたように、「矛盾対立する命題の存在が否定されていない」ことを言うが、これを表す手段はさまざまである(木下 2013)。「たぶん」と「だろう」それぞれがどのように「蓋然性」を表すのか、その相違を捉えれば、「たぶん~だろう」の「蓋然性」のほうが低くなる理由が説明できるのではないか。

3.2節 (本節) では、この観点から考察 を行う。

3.2.1 二種類の「蓋然性」の述べ方

命題 [X] について述べるとき、矛盾対立する命題 [Y] も存在する、と述べれば「蓋然性」が表される。「たぶん」と「だろう」は、この特徴を共有する。しかし、命題 [X] について述べるとき、[Y] の存在についての述べ方には二種類あり、それぞれ「たぶん」と「だろう」の述べ方に対応していると考えられる。

本節(3.2.1節)ではまず、この二種類の述べ方の相違を見ていこう。明日の天気を判断する場合を想定し、仮に[X]を

「晴」、「Y] を「雨」とする。

ひとつめは、「晴」と「雨」をともに真だと認める述べ方である。このとき、「X: 晴」も「Y: 雨」もある確率で成立する可能性があると述べることになる。これを「(命題成立の)可能性」と呼ぶ。

ふたつめは、「晴」を真だと認めつつ、「雨」については、真だと認める可能性があるとする述べ方である。今のところ「X:晴」が真だと認めている(認識している)が、状況の変化などによっては「Y:雨」だと認める(認識する)可能性があるという場合を言う。「Y:雨」という認識の成立する可能性について述べている点からすれば、これを「(認識成立の)可能性」と呼ぶことも可能である。しかしこの呼称では、「X:晴」を認めているという面が抜け落ちる。したがって、これを「(認識内容の)変化可能性」と呼ぶことにする。

二種の述べ方を次のように図示しておく。実線の楕円は「発話時に認識している(真だと認めている)認識内容」、破線の楕円は「認識する(真だと認める)可能性のある認識内容」を表している。

(34)「(命題成立の)可能性」



(35)「(認識内容の)変化可能性」



3.2.2 「たぶん」と「(命題成立の) 可能性」 この二種類の述べ方のうち、「たぶん」 は「(命題成立の) 可能性」を、「だろう」 は(木下2013) が述べるように「(認識内 容の)変化可能性」を表すと考えられる。 このように考えた場合、次例(36)(37) はそれぞれ(38)(39)の意味を持つこと になる。

- (36) たぶん明日は晴れる。
- (37) 明日は晴れるだろう。
- (38)「晴れる」「曇る」など矛盾対立する 命題の存在を認めつつ、「晴れる」にある 程度の確率を認めている。
- (39)〈1〉「晴れる」という認識が得られている。(暫定的だが、ひとつの結論が得られている)〈2〉今後の状況の変化等によって認識内容が変化「曇る」「雨が降る」などに変化する可能性がある。

「だろう」が「(認識内容の)変化可能性」、「たぶん」が「(命題成立の)可能性」を表すことは、疑問化の可否に関する両形式の相違から見ることができる。

「だろう」は疑問文になれる2)。

(40) 太郎は来るだろうか。

これに対し、「たぶん」は疑問文に馴染 まない³⁾。

- (41) * <u>たぶん</u>太郎は来る<u>だろうか</u>。
- (42)??<u>たぶん</u>太郎は来ますか。

疑問化の可否と「(命題成立の)可能性」、「(認識内容の)変化可能性」とは次のような関係にあると考えられる。

(43)「(命題成立の)可能性」を表す: 疑問文になれない。

「(認識内容の)変化可能性」を表す:

疑問文になれる。

このことは、疑問文の意味を分解して 捉えることによって理解できる。疑問文 は「矛盾対立する内容が、選択すべき関 係にある」(森山 1992: 70) ことを表す。 例(40) の場合であれば、「来る(だろう)」 と「来ない(だろう)」とが選択すべき関 係にあることを意味する。

「(命題成立の)可能性」は認識内容も、 それと矛盾対立する命題も、どちらも真 だと認めていることを意味する。「どち らも認める」ことは、疑問文の表す「選択 すべき関係にある」こととは相いれない。

一方、「(認識内容の)変化可能性」は、発話時における「来る(だろう)」という認識と、状況が変わればあり得る認識「来ない(だろう)」とを認めている。ただし、両方が同時に成立することを認めているわけではないので、どちらがより妥当か、「選択すべき関係にある」ものとして提示することが可能である。

以上のことから、疑問文になれる「だろう」は、「(認識内容の)変化可能性」を、疑問文になることができない「たぶん」は「(命題成立の)可能性」を表すと考えられる。

(44) たぶん:

「(命題成立の)可能性」 だろう:

「(認識内容の)変化可能性」4)

3.2.3 「たぶん~だろう」と「蓋然性」

このように考えた場合「たぶん」を用いると「蓋然性」が低くなる理由が説明可能となる。「たぶん~だろう」と「 ϕ ~だろう」はそれぞれ次のような意味を持

つと考えられるからである。

(45) ø~だろう:

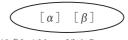
「(認識内容の)変化可能性」

(46) たぶん~だろう:

「(命題成立の) 可能性」と「(認識内容の)変化可能性」の両方

「(命題成立の)可能性」と「(認識内容の)変化可能性」の両方を表すこと((46))は不可能ではない。「(認識内容の)変化可能性」における、「発話時に認識している(真だと認めている)認識内容」((35)の [X])の中に、「(命題成立の)可能性」そのものを埋め込むことができるからである。[X] の内部における矛盾対立する命題を $[\alpha]$ と $[\beta]$ で表し、あり得る認識を $[\gamma]$ で表すならば、次のようになる。

(47)「たぶん」



(48)「たぶん~だろう」



「 ϕ ~だろう」の場合、そう認識しているのは今である、という限定付ではあるが、ひとつの結論を提示していることになるのに対し「たぶん~だろう」の場合、「(命題成立の)可能性」という不確かさが加わる。すなわち、「確かだとは言えないが(「(命題成立の)可能性」について述べるのだが)、今のところこう思っている」(「(認識内容の)変化可能性」がある)ことを表す。

このように考えることで、「たぶん~

だろう|のほうが「蓋然性|の程度が低い #いいだろう| 理由が説明可能となる。

4. 判断を示す責任がある場合

(45)(46) に示した両者の相違は、確 かな判断を示す責任がある場合の認識 表示の可否としても観察される。次例を が、「たぶん~だろう」は不自然になる場 合である。

(49) (天気予報で)

- a. 明日は晴れるでしょう。
- b. #明日はたぶん晴れるでしょう⁵⁾。
- (50)(社長が部下の提案に対して)
- a. それでいいだろう。
- b. # たぶんそれでいいだろう。

(51) a. (EPA サプリメントは:引用者の 補注)通常の食材に由来する成分であり、 問題となる健康被害や副作用は知られて いない。他のサプリメントや医薬品との 相互作用は報告されておらず、併用は問 題ないだろう。 (サプリメント小事典) b. # <u>たぶん</u>併用は問題ない<u>だろう</u>。

これらは、報道者や社長、あるいは識 者として、責任を持って判断を下すこと が求められている文脈下の発話だと考 えられる。「 ø ~ だろう 」 も容認されるの は、認識内容が変化してもおかしくない、 困難な判断について述べているからだと 考えられる。このことは、次の(52)にお けるペンの貸し借りのような単純な判断 の場合、「ゅ~だろう」は不自然であるこ とから確かめられる。

(52)「ちょっとペン貸して」「いいよ/

(三宅 2011:200 の例文(21a))

しかし「たぶん~だろう」を用いると、 「よくわからないが」というニュアンス (「(命題成立の)可能性」)が加わる。発 話時において可能な限りの結論を出し、 それについて述べる責任を負っているこ とにはならない。これが「たぶん~だろ う」が不自然な理由だと考えられる。

5. おわりに

本稿は、「たぶん~だろう」と「ゅ~だ ろう」の相違を記述し、その記述と「たぶ ん」と「だろう」の意味との関連について 考察を行った。第1節(I)(II)で提示し たこの二つの問いに対して得られた結果 は、それぞれ以下のとおりである。

(Ⅰ)「たぶん~だろう」のほうが「ゅ~だ ろう | よりも 「蓋然性 | の度合が低い。 (Ⅱ)「たぶん」は、「(命題成立の)可能性」 を表す。

「たぶん~だろう」と「ゅ~だろう」は 類似度が高く、その差異が読み取りにく い。ここから、「たぶん」は単に文末(「だ ろう」)を予告する機能(「誘導機能」)を 持つにすぎず、「修飾・限定の対象を持 ちはしない」(渡辺1971:312)とされる こともあった。しかし、本稿の考察結果 (I)は、「だろう」と「呼応」する際、「た ぶん | が 「よくわからないが | というニュ アンスを加えて「蓋然性」の程度を下げ るという、「修飾」機能を持つことを示し ている。共起頻度の高い類似形式(「呼 応」)における陳述副詞「たぶん」の役割

の一面が明らかになったと言える。

「たぶん」そのものの意味記述に関して、残された課題は多い。(Ⅱ)の記述は「たぶん」の一面を確かに捉えており、これにより、「たぶん~だろう」と「ゅ~だろう」の相違は説明可能である。しかし、「きっと」など他の副詞との相違を含めた特徴把握、共起する文末形式の頻度差の理由の説明、「だろう」以外の形式と共起した場合の役割の記述などが、今後の課題として残されている。

注

- 1)「多分(漢字表記)」「でしょう」も考察 対象とする。「たぶん」や「だろう」と それぞれ意味的に近似する「おそらく」 「であろう」は、今回の考察対象からは 除く。
- 2) 疑問化に関する考察は、森山 (1992) に負うところが大きい。
- 3) 相手の提示した認識内容をそのまま 繰り返して問い返したり、相手の認識 を先取りして予測し、それを問うよう な場合を除く。
- 4)「だろう」が「(認識内容の)変化可能性」を表すと考えることで、「だろう」が「不変化助動詞」(金田一1953など)であることも説明可能である。詳しくは木下(2013)参照。
- 5)「#」は特定の文脈における非文を表す。

参考文献

木下りか(2013) 『認識的モダリティと推 論』ひつじ書房

金田一春彦 (1953) 「不變化助動詞の本質 (上)」 『國語國文』 22-2 pp.1-18

- 工藤浩 (2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩著『モダリティ』岩波書店 pp.164-234
- 杉村泰(2009)『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』ひつじ書房
 - 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと 意味』Ⅱ くろしお出版
 - 時枝誠記 (1950)『日本文法口語篇』岩波書店 (=1978 改版 岩波全書)
 - 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用 法辞典』 東京堂出版
 - 三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
 - 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川 書店
 - 森本順子(1994)『話し手の主観を表す副 詞について』くろしお出版
 - 森山卓郎(1992)「日本語における「推量」 をめぐって」『言語研究』101 pp.64-83
 - 山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文 館

渡辺実(1971)『国語構文論』塙書房 渡辺実(1974)『国語文法論』 笠間書院

用例の出典

BCCWJ (現代日本語書き言葉均衡コーパス)による。

(武庫川女子大学)